The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	みんなで作るアート・インスタレーション : 知的障がい児, 美大生, 一般ボランティアによる共犯的ものつくり遊びの可能性
Author(s)	島先, 京一
Citation	デザイン理論. 2012, 59, p. 108-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53590
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

みんなで作るアート・インスタレーション
── 知的障がい児，美大生，一般ボランティアによる共犯的ものつくり遊びの可能性 ──

島先京一／成安造形大学

知的障がい児を対象としたボランティア活動としての造形活動によるワークショップは，専門的な芸術家や美術を学ぶ大学生，或いはアマチュアなど様ざまなアーティストによって，展開されている。これらの造形ワークショップにおいて最も一般的な方法は，専門の高等学校や美術大学等で行われる造形教育プログラムの一部を，専門家がサポートしながら知的障がい児にも経験してもらおうというものであろう。こどもたちは，日常生活の中ではなかなか触れる機会のない専門的な道具や素材を直に手にし，平均児が平均的な学校教育の中では知る機会のないようなことを体験することになる。そしてそのような非日常的な体験はこどもたちにとって，情操教育支援及び，余暇活動支援の貴重な機会となろう。きわめて例外的な事例ではあろうが，こどもが本人や保護者もそれまで気がつかなかったような才能を発揮することにより，アール・ブリュット・アーティストの発見ならびに育成につながる可能性もある。指導するボランティア・アーティストにとっても，自らの表現活動の中に社会性を見出す機会ともなり，また時にはこどもたちの表現の中から制作のヒントを得ることもある。アートやデザインを学ぶ大学生にとっても，障がいのあるこどもたちとの交流を通して，社会の多様性を知る機会となり，その教育的意義は高い。このように，造形活動によるワークショップは，参加する人びとに対して様ざまな意義をもたらしてくれる可能性をもっている。

しかし造形活動によるワークショップは，プログラムの設定によっては，参加者に能力主義的な観点を与えてしまう可能性もある。プログラムが，伝統的な，或いは慣習的な絵画表現や立体表現を目指すような設定である時，このことは起こりやすいと考えられるが，それは，参加者や指導者がその表現結果の巧拙の差にどうしても目を奪われてしまうからである。障がいの根拠を，個人の能力的な欠損ではなく，社会の受容の不備に求める障がい学の基本的な立場からすれば，能力主義は批判し，克服すべき対象の一つである。そして，能力主義的な目標設定を立ててしまった造形活動によるワークショップは，うまく表現できないこども，何を目指せばよいのかわからないこどもにとっては，善意にあふれた大人によって仕方なしにやらされている活動に過ぎない可能性もある。

私も約十年間近く，美術を学ぶ大学生との協働の中で，知的障がい児を対象とした造形活動のワークショップを展開してきた。最初の頃は，知的障がい児福祉の現場に美術を学ぶ大学生を同行させることの教育的意義を重視していた（註）。また障がいとともに育つこどもたちの中に，思わぬ才能を見出すことができるのではないかという期待ももっていた。しかし，自ら実践を積み重ね，或いは他のボランティアによる同様の取り組みの成果を観察していく中で，ワークショップの成果は指導者の力量を反映するものであって，こどもたちの自主的なものつくりに対する意志の発揮では必ずしもない場合が少なくないことに気づかされた。こどもたちを含めた参加者すべてが，能力主義にとらわれずに楽しめ

るワークショップの必要性を感じ始めた私にとって，重要な導きをもたらしてくれたのが，現代美術の考え方，ならびに現代美術に特有の表現形式である，インスタレーション（仮設的装置）の方法であった。

現代美術が目指しているものは，直観的価値観の不断の脱構築であるといってよいであろう。現代美術のアーティストは，常に既成の価値観を否定しながら，「おもしろい」という，単純ではあるが深みも備えたキーワードに従って，新しい価値観の呈示を図る。そしてインスタレーションという，作品の永続的存在を最初から前提としない表現形式は，その仮設性ゆえに現代美術の特性を最もよく表していると考えられる。私は，知的障がい児を対象としたワークショップにおいて，こどもたち，美術学生，そして一般のボランティアとともに，アート・インスタレーションの制作に取り組むことを考えた。

私が取り組んだのは，できる限り安価に入手することができる日常的な素材を用いて，室内等の普段見慣れている景色を，一時的に改変してしまおうというものである。安価で日常的な素材を用いることには，大量に導入することによって風景の劇的な変化をもたらしたいということと，通常の使用法とは異なる方法で用いることで，意味や機能の脱構築がもたらし得る直観的な快感を経験してもらいたいという，二つの狙いがある。このようなインスタレーションにおいては，行為の成果に巧拙の差が表れにくく，専門家もこどもたちも，そして一般のボランティアも，殆ど共通する立場から現代美術の楽しさを味わうことができる。

例えば私は，2010年８月26日の大津市北部サマースクールにおいて，会場であった公民館の和室に大量のトイレットペーパーを持ちこみ，鴨居や欄間，或いは長押等をアンカーとして，部屋中に張り巡らすというインスタレーションを行った。最初は何が始まるのか戸惑いながら見ていた，こどもたちや美大生ではない一般のボランティアたちも，私たちの動きに徐々に興味を示し，やがては満面の笑みを浮かべながら，トイレットペーパーを張り巡らせていったのである。一つの部屋にトイレットペーパーを張り巡らせること，このことに取り立てて何か意味があるわけではない。やがては撤去してしまうのであり，行為そのものは有用性を中心とする観点からは，まったく無意味ですらある。しかし意味性の表れにくい行為であるがゆえに，その過程を等しい立場から共有するという，共感性の高さは，純度を強く示しながら現れるといえるのではないであろうか。

一般の家庭や学校教育の現場ではいろいろな理由から実施が難しいような，いたずら心に基づいたインスタレーションを，障がい児福祉の現場に持ちこむこと，恐らくこのことの効用を計測し評価することは，簡単ではないと思われる。しかし，こどもたち，保護者，そして一般のボランティアの満面の笑みが溢れる私たちの取り組みは，何らかの意義をもつと信じる。

（註）

SHIMASAKI, Kyoichi, “Significance of social welfare activities for design education – On exchange between intellectually challenged children and design students”, 2008 in “Proceedings of the 6th International Conference of Design History and Design Studies”, pp. 480-483

SHIMASAKI, Kyoichi, “On Recognition of Continuity between Disabled and Average People, and Its Significance for Design Education”, 2010, 成安造形大学紀要第１号　125-139頁